

「二つの道」(要旨) 聖書箇所：マタイ 7:13-23

【1】 狭い門から入りなさい

主イエスの「山上の説教」の最終部。イエスは群衆に「狭い門から入りなさい」と招きました。ここでは、入口の詩的表象として「門」が用いられています。二種類ある門のうち、救いに至る門を選ぶよう説かれました。この「狭い門」は多くの人が殺到するいわゆる「狭き門」ではありません。「…見出す者はわずかです」(14)とありますように、簡単に見落としてしまうような小さくて「狭い門」なのです。

【2】 二つの道

イエスは二つの道を提示しました。一つ目は、滅びに至る門へ向かう道です。その道は広く、大多数によって踏み固められています(13)。二つ目は、いのちに至る門の道です。それは、見出す者はわずかであるため細い道です(14)。私たちは日常的に自分の向かう方向が正しいか周囲の動向を見て確認します。いのちに至る門の道の場合、大勢の動向はあてにはなりません。あるいは少数が選択する道もそうです。少数であることがいのちに至る道とは限りません。イエスの言う「細い道」はどんな道なのでしょうか。

【3】 「みことば」はいのちに至る門を示す
信仰の旅路を描いた「天路歷程」(パニヤン著)の物語の前半で、「伝道者」は「基督者」(主人公)に門に至る道を指南しました。そのやりとりを紹介しましょう。

「向こうのくぐり門が見えますか。
男は言った、いいえ。

…向こうの輝く光が見えますか。

『見えるように思います』と彼は言った。
そこで伝道者は言った、あの光から目を離さないで、まっすぐにそこへ登っていきなさい。そうすればその門が見えるでしょう。」

「向こうの輝く光¹」は、聖書のみことばのことです。聖書のみことばは、私たちに向かうべき道を照らし、イエス・キリストを示します(ヨハネ 20:31)。ところが、羊の衣を着た偽預言者たちは、「みことば」を利用して自論を展開し私たちを惑わします。「みことば」に生きる人は、口先で「主よ、主よ」と言って満足する人ではなく、父なる神のみこころを実践する人です(7:21-23)。ところで「輝く光」を目指した基督者は一直線に「くぐり門」に到着できたのでしょうか。途中「世才氏」と出会います。彼は「人が真剣に聖書を読むことを好まない」人物で、基督者に「狭き門より道徳を選ぶ」ように勧めました。基督者はその助言に従い「道」から外れました。立往生した所で「みことば」が与えられ、道から外れたことに気が付き、再び「門」を目指して「細い道」を歩きました。



「くぐり門の基督者」G・クルックマン作
パニヤン著『天路歷程正篇』新教出版社

【4】 道は一つ

「頂上への登り道はいろいろだが、頂上は一つ。登ってしまえば同じ景色が見える。」と考える人もいるでしょう。しかし主イエスは「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれも父のみもとに行くことはできません」(ヨハネ 14:6)と言われます。

▷みことばの「輝く光」に照らされた道には喜びと希望があります。私たちは、今朝、どこに向かい、何を目指しているのでしょうか。「輝く光」に心躍らせ、みことばに示された道を歩む一週間となりますように。

¹ 同書脚注は「キリストと、彼に至る道は言葉によらなければ見出すことはできない」と述べ、詩篇

119:105 等を記載する(パニヤン『天路歷程』42頁)。